

幼少期の親子関係を引きずる学生たち

人間科学部、学医（精神科医） 小林 隆 児

学医として学生相談に関わるようになって早5年半の月日が経過した。月1回の学医相談ゆえさほど多くの学生と会ったわけではないが、出会った学生一人ひとりが今でも印象深く私の心に焼き付いている。そこに共通して見られるのは、多くの学生たちが幼少期の親子関係を引きずり、自分という存在を持て余して苦悩している姿である。その中でもすぐに蘇る記憶がいくつかある。

自分の進路に悩みつつも家族のことが気になるということのある女子学生からの相談であった。本人は下宿生活をしてきたが、実家の母親のことが心配なので、卒業年度にもかかわらず実家に帰ろうという。しかし、母親への反撥心が見え隠れしていた。そこで私はその点を話題にして「お母さん」といろいろとやり合うようだけど、お母さんに随分同情もしているよね」と訊ねた。すると彼女は「私もよくわからないけど、子どもみたいな人。ムキになるところがある。幼い人」と批判的なことを言う。そこで私は「お母さんは子どもっぽいな」と彼女の話に同調して応じると、今度は「でもできることはできるんで。料理とかは」と反論するように肯定的に返したのである。

私は彼女の話聞きながら、なぜ彼女はあと一年で卒業する段階になって実家に帰ろうとしたのか、その理由を知りたくなった。そこで両親のことについて訊いていく中でこのような応答が見られた。彼女は両親の関係がどうも気になり、母親にいたく同情している様子なので、私もそれに同調するように話を合わせたところ、今度は逆に母親を批判するようなことを言う。そうかと思ひ、今度はそれに同調するようにして語りかけると、これまたさきほどと同じように、私の同調的発言に逆らうように応じている。私はこのような彼女の対人的態度に、正面切って母親に反撥することができず、母親への依存との狭間で大きく揺れ動いている心を見て取った。

次に述べるのは、一見すると発達障害を疑わせる女子学生である。他人の言葉の意味を即座に掴み取れない、人の話を聞いても概略を掴めない、同時に二つのことを言われると大混乱するなどの相談であった。しかし、いざ会ってみると、会話に不自然なところは感じない。そこでこれまでのそだちについて訊ねていった。そこで浮かび上がってきたのは、両親の期待の大きさであった。彼女はそれに応えるべく頑張ってきたことが語られた。しかし、彼女はその期待に応えられるような才能がないことに高校生になってやっと気づいた。そんなことを率直に語る中で次第に彼女は涙目になった。そこで私は今の気持ちを訊ねた。すると「親に対して申し訳ない」と語るのだった。

彼女の訴えの背景には、両親の期待に応えようとして懸命に生きてきたことが強く関係していたが、それは幼少期から彼女がいかに両親（をはじめとして他人）の顔色を窺いながら生きてきたかを強く疑わせるものであった。私はそんな彼女の姿を見て「かわいそうに」と思わず口にした。

学生相談をしていると、否が応でも自分の大学生時代を思い出す。私も両親の期待を一身に背負って受験勉強を死に物狂いで過ごした世代である。しかし、幸い大学に入ってから下宿生活を送ることで両親の縛りから解放されて、文字通り疾風怒濤の青年期を送ることになった。そこでは大変な心理的混乱を経験し、やっとの思いで自分の道を切り開いたように思う。大学生時代は誰にとっても大変な時期である。ただ、最近の大学生の多くは、経済的事情も手伝って大学に入学しても両親とともに生活することを余儀なくされている。反撥して自分の道を切り開こうにも、経済的に自立していない身ゆえ、どうしても両親の顔色を窺わざるをえない。私は学生の悩みを聞いていて、そんなところに同情している自分を発見することが少なくない。